

福島レポート

20110426 横浜集会・資料



▲ 町中に船(4月7日仙台市内)

4 月に跳ね上がっていた。福島原発に近いパーキングでは安積 119 カウント、安達太良 88 カウント、吾妻 100 カウント、国見 70 カウント。原発から 60 キロ県内でも横浜のおよそ 5 倍だ。

仙台市内に入った当初、被災地という印象はなかった。いくつか破損して使用できなくなったビルも見受けられたが、市内の店の多くは営業しており、心配していたガソリンスタンドも普通に営業していた。護憲平和センターの菅原事務局長の案内で仙台市の海側の被災地を視察する。そこは仙台市中心部と全く違った光景があった。仙台は中心地から海に向かってほとんど起伏のない平野が広がる。若林区を案内してもらったが、広大な平地に海から数キロほとんど何もない元の道路もわからない状態だ。仙台市のこの地区は海側に県道 10 号線その内側に仙台東部道路という高さ 10m ぐらいの有料道路が南北に走っている。この道路から海側を眺める。車や松の原木が点在する。2 キロぐらい先だろうか海岸に松林が見えるがところどころ松がないところがある。道路の内側も大差はない。巨大な津波はこの有料道路にぶつかりこれを乗り越えることはなかったが、押し寄せた濁流は出口を求めて道路の下のあいた所から噴き出し、内側までも濁流で包んだ。道路から遠くに小学校がぼつんと見えるが、駐車していた車はすべて流されたと言う。この地区は水田が多いのだが津波で塩分濃度が高くなり、元のように稲作ができるのは難しいに違いない。ちなみに仙台市内での放射能検知器のカウント数は 20 を超えなかった。

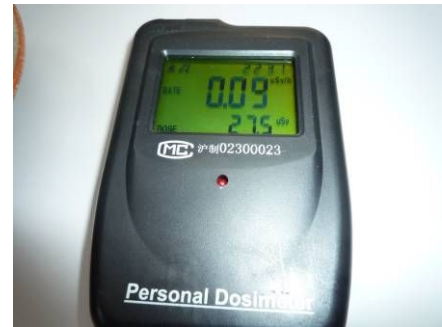
7 日に仙台、松島の津波の被害を見た後、8 日、宿泊地の白石から福島に向かう。白石駅でのカウント数は 30。やや高めだ。福島に近付くにつれてカウント数は増える。国見パーキングエリアで 64。福島市中心ではなんと 150 カウントになった。横浜の 10 倍だ。竹中福島県教組委員長から話し聞くことができた。福島は原発による放射能のため、支援や復興が今でもストップしていること。学校現場は放射能にどう対応しているのか明確な指示がないこと。放射能から子供たちの安全を守りたいがデータが示されない。また、南相馬市は放射線のレベルは低いのに 30 キロ圏内ということで屋内退避とされ、まったく人影がない状態。30 キロを超えても放射線量の多い地域がある。子供の安全を守るためにはもっと細かく情報を提供する必要があることを強調された。

委員長の薦めで、原発から 35 キロは離れているのに福島県内で放射線レベルが高いと言われる飯館村と避難地域の 20 キロと屋内待機の 30 キロ圏内にまたがり、放射能のレベルが低いと言う南相馬市に行くことにした。

福島では地方紙で県内の放射能測定地を時間単位で報道している。貴重なデータだ。高速のパーキングエリアでも測定していると「今日はどうですか?」とか、道の駅では「それ市販されてるの?」と聞かれ

た。当然放射線への関心は高い。テレビの専門家と言われる人の「安全」という言葉より、現地では具体的な数値が必要とされていることを実感する。

福島市中心部から車で 25 分。UFOの里というバス停そばで計測した。カウント数は 188。土壌はもっと高かったので側溝の乾いた泥の上で測定した。なんと 1278 カウント。その後いろいろところで側溝の放射線を測定したが、こんなに桁はずれのカウントはなかった。原発から大量の放射能が放出されたとき、空気中のチリが高濃度に汚染され、雨で落とされ側溝に流れた。泥や枯葉がフィルターとなって放射能を持った元素が溜まっていると考えられる。このことは地域によっても当然被曝の量は異なるが、同じ地域でも地面からの高さや特定の場所でもそれぞれ被曝量が異なるということだ。各地のモニタリング場所の測定は進めなければならないが、もはや福島全体が「放射線管理区域」なのだから、個人個人が放射能の線量計を身につけての被曝量の積算値を自分で知ることができるようにした方がいいようだ。事実竹中委員長は被曝線量計を常時携帯していた。1台4万円で購入。今は品薄で手に入らないと言う。1台4万円だから福島県民全員の206万人に配布したとしても824億円。原発を推進するための電源三法による地元交付金は2010年度予算額で1248億円。原発を推進していた巨額な税金に比較すると大した額ではない。



▲ 竹中委員長携帯の線量計

飯館村と南相馬市

飯館村役場には移動式のガンマー線測定器が置かれていた。現在の放射線値とその日のその時点までの最高値が見ることができる。4月8日11時58分の値は5.84 μ Gy/h (マイクログレイパーアワー)。その日のこれまでの最高値は 5.86 μ Gy/h。 μ Gy/h はマイクログレイパーアワー、1時間当たりの吸収線量と言われ、被曝量のシーベルトを計算する元の単位だ。

ガンマー線の場合は1シーベルトが1グレイなので、この値はそのまま 5.84 μ Sv/h と理解して差し支えない。多分新聞に掲載されているのもこの数値なのだろう。ここに8日いれば1.1ミリシーベルト年間の被曝の基準を超えることになる。でもこの飯館村は30キロ圏外で屋内退避の勧告もないのだ。

この役場での我々の測定結果は次の通りだ。飯館村村境、地面から1m362カウント。地表632。飯館村役場地面から1m386。芝生の上994。コンクリート上893。側溝733。このデータを見ると大気中から受ける放射線と地面に蓄積された放射線の受ける割合が、2対1ということになる。(地表の測定は空気中の放射線もカウントされるので地表からの放射線は測定値から空気中のカウント数を引く)今後、放射能がまったく原発から放出されなくても3分の1は残る。土壌汚染が進んでいると言うことが深刻だ。

飯館村から南相馬市へ。南相馬市との境界付近で車内で測定すると196カウント。依然高い。ところが南相馬市に近づくにつれて原発には近づいているのにカウント数は急に減っていく。市の中心街で車内で41。支援物資の拠点になっている道の駅でも62カウント。地表も72カウントだ。福島市内よりはるかに少ない。それでも人通りは全くない。20キロ圏内の人は避難したし、20キロから30キロの人は屋内待機



▲ 飯館村役場に設置された測定器

だからだ。昼食は南相馬でと思っていたがどこも開いていない。空腹に耐えていた時、「空いてる。」と。Uターンして店まで行ってみると美容院だった。コンビニ以外営業している店を探すのは難しい。

20キロ圏内に入りことを試みた。きっちり20キロのところまで進入禁止とされていた。迂回して道を探し、20キロ圏内に入って海岸線に出た。テレビで見るあの津波の惨状を見た。仙台でも見たが、南相馬で見たのはまだ人が入れない手つかずの被災地だ。くずれた家屋に人が眠っているかもしれない。この視察ではいろいろな車とすれ違う。水の上を走れる水上車も見た。海に流された遺体を捜索するものだと想像できる。でも原発の周辺は1カ月近くたっても、行方不明者の捜索すらできないのだ。今いる私たちのそばに眠っている人がいる。

海岸線の道は崩壊亀裂があちこちにあり、ここにはJAFも来ないに違いないと、規制地域の外に戻ろうとうろろうろしていたら、白い防護服の人たちが作業をしている。改めて、放射能危険区域にいるんだと思ったが、ここは私たちの検出器によれば、福島市内より放射能の被曝は少ない。その後、福島の地方紙を見た。私が見た防護服の人たちは警察の人たちだった。その記事には4月7日に初めて捜索が開始されたとあった。

科学者が「想定外」なんていう言葉を発すること自体が腹立たしい。これは人災以外何物でもない。歴史上類を見ない人災だ。科学者はこの惨状を直視すべきだ。科学者が作った人災を解決する手段や方法は科学者の手によるしかないのだから。



▲ 南相馬市の道の駅は救援基地に



▲ 原発20キロ圏内南相馬市



▲ 南相馬市海岸、頑丈な橋も流された